

---

# 延寿今昔物語集

わたぬけ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

延寿今昔物語集

### 【Nコード】

N3498Y

### 【作者名】

わたぬけ

### 【あらすじ】

成杜”ジョウト”という大地にあった古の都、延寿京。

京をめぐる人々が物の怪が、過去が現在が、そつとめぐり合う。

## 序

幾年遙昔、桔梗都跋扈厄災陰謀諸不幸事。  
主上嘆之、遣使者行姥女八幡宮、授託宣也。

託宣曰

從是北方、有槐之森  
其地豐潤、神々守護  
此処拓而、宜造都也  
有空神、造都後当東方建塔、称之  
有水神、造都後当西方建塔、称之

主上受之、乃發布遷都之詔。  
過数年、遂完成都。

主上因豐槐、又願永平安、因號此都、延寿京也。

いくとせもの遙か昔、桔梗の都厄災、陰謀、諸々の不幸事跋扈す。

主上之を嘆き、使者をして姥女八幡宮うはめに行かせしめ、託宣を受す也。

託宣に曰く

「これより北方に槐の森有り  
其の地豊潤にして、神々の守護有り。  
此処を拓きて、よろしく都を造るべし

空の神有り。 都造りし後、 当に東方に塔を建て、 之を称えるべし  
水の神有り。 都造りし後、 当に西方に塔を建て、 之を称えるべし  
し」

主上之を授かり、 遷都の詔を發布す。

過ぐること数年、 ついに都完成す。

主上槐豊エなることに因み、 又平安永くならんことを願ひ、 因りて  
此の都に延寿京エンジュキョウと號す也。

『成社紀』より

むかしむかし、それはそれは千もの年月よりも遙かにむかし、延<sup>ユ</sup>寿<sup>ミヤコ</sup>の京に平雅信<sup>たいやのまさのぶ</sup>という貴族がいた。

先の帝、陽浄帝と女房で前関白葛原元経の娘、園子との間にもつけられた男子であつた。しかしながら春宮には既に長子である昌明王が立太子されていたため、元服の後は臣籍降下され平氏の名を賜り、左京の五条四坊に屋敷を授かることとなつた。

この平雅信、顔立ちは大変彫りが深く、また背丈も五尺と半という稀なる高身長であつたにも関わらず、哀しいかなそのような容貌の男は当時としては受け入れがたいものだったため、あまり女にもてるというものでもなかつた。

しかしながら楽を深く愛しその腕前も大変巧みなるものだった。いずれの時か鈴の塔にて楽献納に参加した折、それはそれはまるで天人の奏でるが如き美しい横笛を披露したため、主上から「雅信の笛声、まさに飛天のごとし」と讃えられ以降内裏で催し事が行われる際は必ずと言って良いほど呼ばれることとなつた。もちろん奏でる楽器は横笛<sup>おひつてき</sup>だけでなく琵琶、箏、笙、箏<sup>ひちじき</sup>など雅信公に奏でられぬ楽器はこの世に無しと囁かれるほどであつた。

さて、そんな平雅信公であるが、これは後の世に伝えられた寓話の一つ。

ある日内裏での公務を終え、屋敷へと大隻牛<sup>ケンタロス</sup>の引く牛車に揺られて帰っていた。空は鮮やかな茜色に染まり、間もなく夜の帳が落ちようとしている。雅信は早く屋敷に戻り、月を眺めながら一曲奏でたいものだと思つていた。

そんな折、雅信の耳を楽の音色がくすぐつた。延寿京でこの雅信を他にして楽への愛の勝るものはなし、背筋をピンと伸ばし公務の疲れはどこへやら吹き飛んでしまつたかのよう。そして一音たり

とも聞き漏らすまいと耳をすました。それはそれは甘美なる笛の音色。その声味たるや

そこで雅信は是非ともこの稀有なる調べを奏でている奏者に是非とも会つてみたいものだと考え、牛車から顔を出して牛を引く童にこの調べが聞こえる方向へ向かえと指示した。ところが童はよしましよう、もう屋敷へ戻りましようと反対する。それもそのはず、空を見るともう日は西の山の向こうへ姿を消し、西空が名残惜しく朱を交えたように赤く染まり、その手からこぼれたほとんどはもう真つ暗に近い藍色に支配されていたのだから。

なにせ夜の灯など朱雀大路に燃やされる篝火くらいしか他に無い時代のこと。少し通りから外れて小路へと入り込むと一寸先は闇という言葉がそのままに表されるほど暗闇に覆われてしまう。それだけならまだしも、夜は物の怪の領分。特に実態が見えなかつたり、人を化かしたりする霊鬼“たまおに”“りょうき”と呼ばれる物の怪が跋扈すると言われている。霊鬼にあてられた人間は魂を吸い取られたかのように無気力になったり、重い病気を患つて死に至ると信じられていた。他にも喰われて喰い残しの死体は羅成門に捨てられるだとか、霊鬼絡みで死んでしまった魂は摺鉢山すじばちやまにあるとされる地獄への門の奥へ連れられるだとかいう話もまことしやかに語られていたのである。それらのことを鑑みるに、童の言い分も至極まかつとうなことであった。

しかし樂のこととなれば寝食も忘れてしまうこの平雅信。嫌がる童に食い下がり、命令だからこの笛の聞こえる方へ牛を走らせよと声をいからせる。しかし童は地に頭を付けてお願いですからどうかご勘弁をと遂には泣き出してしまう始末。樂のこととなると見境のなくなる雅信であるが、元来はとても慈悲深い気概。笛の音色の方へ牛車を走らせるのは諦めることとした。

しかし笛の音色を求めることを諦めたわけではなし。雅信公は車くるま副まいの一人から松明を受け取ると家来たちに先に帰つても良いぞと言まい、彼らが止めるのも聞かず笛の声の聞こえる方へと一人で歩き

始めてしまった。

さて、雅信は笛の音色の主を求め歩く。音のする方向へ音のする方向へと足を向ける。大路を横切り真つ暗な小路に入り込んだと思つたらまた大路に戻り、そうするうちについに空は完全なる夜に覆われ、まるで壮大な浄土図でも描くが如き星の輝きがそつと降りてきた。

笛の音は少しずつであるが確実に近づいている。そして近づくに連れてその妙なる響の仔細が表れてきた。それは妖艶にしてこの世のものとは思えぬ微妙音。みみょうおん

嗚呼、私の耳に狂いはなかった。主上から飛天の如き笛声と讃えられた私だが、この音色こそ天界の楽と呼ぶにふさわしいではないか。

雅信ははしたないと知りつつも次第に小走りになる。やがてそれまで通っていた小路道を抜けると壮健たる塔の前へと出た。ここは大内裏より戌亥（北西）の方角に佇む鐘の塔。今の主上より六代前の高武帝が都をここ延寿に移す折、姥女大社より授かった託宣により同じく大内裏より良（北東）の方角にある鈴の塔と共に建てたという九重の塔。

その塔からこの天界の楽と呼ぶが如き笛の音色が聞こえてくる。空はもはや完全たる闇に染まり、摺鉢山の向こうから折しも昇つた半月が鐘の塔を青白く照らしていた。

まるで冥府に迷い込んだかのようだ。

雅信は自分が手に持って掲げている松明がどうにもこの場にとつて些か場違いであるかのように思え、さりとてもしこれを手放して霊鬼に当てられるようになったらという考えも浮かび、その二つが堂々巡りとなっていた。するとその時、塔の側に誰か人影がちらつくのを目にした。雅信の松明の明かりにぼんやりと照らされ、彼の人物の足元では影がゆらゆらと波のように揺れていた。しっかりと明かりに対して影が映るのを見るにどうやら人であるらしい。

するとその人影も雅信に気づき、ゆつくりとこちらへ近づいてくる。そのうちにどうやらこの者は笛の主とは違うらしいと気づいた。その者は草色の僧衣、あずき色の袈裟を身に纏っている。どうやらどこかの寺の僧であるらしい。齡は四十、あるいは五十くらいと見受けられた。柔和でありながらどこか厳しそうな皺を顔に刻み、背丈は五尺ほどと雅信に比べれば大分小さい。尤も、雅信のほうが大きすぎるとい話でもあるのだが。両者は互いに深々と頭を下げると、雅信の方から切り出した。

「おぬしもこの笛の声に誘われてやってきたのであるか？」

「ええ。拙僧は摺鉢山延妙寺の浄厳と申す」

「浄厳殿とな。お噂はかねがね伺っておる。市井に出て名も無き人々のために念仏を唱えたり、田畑を焼く炎狐を退治したりと」

「いえいえ、そのようなこと世の人々の誇張でしょうに」

それから雅信は次に己の身分をこの浄厳に明かした。浄厳はほうほうと頷きながら興味深げに雅信の足元から烏帽子の先までを反芻するように眺めた。

「こちらこそ雅信殿の噂は耳にしておりますぞ。その楽の才は世極まるどころにて主上からも深く気に入られているらしいではありませんか」

「八八八、楽しく取り柄がないだけであるさ。一応官位も頂戴しているものの、政のような難しきことはとんと分からぬ」

「そしてその樂が、雅信殿をここへ連れてきたというわけでありま  
すな」

雅信は笑いながら頷き、そして二人は今一度鐘の塔を見上げた。

笛の音色は二人が話している間も鳴り止むこと無く流れ、どこまでも響きわたっていくかのようだった。

「そういえばなぜ摺鉢山の僧侶たるおぬしがここへ？」

雅信はかねてより抱いていた疑問を浄厳へ投げかけた。

延妙寺とは摺鉢山に建つ寺院である。摺鉢山は延寿京より良の方角にそびえる山で、成杜国の靈山の一つであった。広大な洞窟が走

り東方の伏戸ふすへなどの地方へ行くための重要な交通路であるのだが、都から良すなわち鬼門に位置するためそれを抑えるべく、山には壮麗なる伽藍を持つ寺宇が建造された。それが延妙寺であった。

浄厳は塔を見上げる視線を揺らがさぬまま、少し躊躇するように間を置くと、やがて語り始めた。

「実はですな。今より十日程前のこと、延妙寺の宝物蔵が何者かに荒らされたのでございます。結構な騒ぎになりましたな、すぐさま蔵を整理し所蔵目録と照らしあわせたのですが、奇妙なことにたった一つの物を除いて何も盗まれても壊されてもいない。どうやらその一つの物だけが目的であったようだな」

「その盗まれた一つとは？」

「龍笛です」

言葉を強調するように浄厳は言った。雅信はゴクリと唾を飲み込む。

「蓮夢はすゆめというそれは見事な笛でして、西方の唐土よりもたらされた名器でございます。笛が吹き手を選ぶと言われるほど気難しい楽器であるが、ひとたび手懐けるとその音聲その名のごとく夢を見ているような心地にいたすと言われております。そしてその名器が何者かに盗まれた。私は数日前より市井に降りてみ仏の教えを民に説くとともに、盗まれた蓮夢を探しておりました。するとさきほどの先にあります庵に戻る折り、どこからか笛の音が聞こえる。もしやと思い音を辿ってみるとこの鐘の塔にたどり着き、雅信殿に会ったという次第。いやはや、盗まれた龍笛を求めてかの有名たる雅信殿に会おうとは、これも必然と申しますかもししくはみ仏のご縁というものでございましょう」

浄厳はそつと手を合わせると鐘の塔に向かって頭を下げ、小さく念仏を唱えた。

「ではこの笛の音が盗まれた蓮夢かもしれぬということか」

「決まったわけではありませんがおそらくは……。なにせずっと蔵に収められていた故、拙僧もまだ一度も蓮夢が奏でられているとこ

ろを見たことがなかったのだ」

「なるほど。となるとますますにこのまま奏者も分からぬままだ聴いて帰るだけというわけにはいきますまい」

浄厳は低く笑った。つられて雅信も笑う。改めて二人は鐘の塔を見上げた。そして何も言葉を交わさぬにも関わらず、申し合わせたように歩き始めた。ザツザツと白洲の砂を踏みしめる音が鳴る。塔の入り口の前に差し掛かった時二人は同時に気づいた。

「これは……錠が壊されておるな」

中に誰かがいるのはどうやら間違いない。そこで雅信はもしうっかり塔を焼くようなこととなると笑えぬということで松明の灯りを消した。唯一の光がなくなり、あたりに墨をかぶせたように暗闇が覆った。そうなるとさすがの二人もこの暗闇を前にしては多少の恐怖を感じないでは居られない。しかしそれでも笛の音はこの場を離れたくないという欲求を起こさせるに十分であった。

二人は暗がりの中で塔の扉を開く。幸いにも塔を上まで登る必要はないようだった。なぜならこの笛の音は明らかにこの第一層から聞こえてくるからだ。雅信と浄厳は顔を見合わせるとやがて両者意を決して音を立てぬように塔中へと足を踏み入れた。

中は真闇にして己の手足さえ目に映すには容易ではない。木の格子からわずかに月明かりが漏れ入っているものの、その申し訳程度たるや気休めという他ない。

二人はゆっくりとだが奥へと入っていく。

雅信は震えていた。物の怪とも知れぬ得体のしれない笛の主旋律を飲み込むように包みこむ暗闇に恐怖したのではない。それは感動の震え、興奮の震え、魂の底より体全体へと伝わる震えだった。それを起こさせているのは他でもない、この龍笛の音色だった。外で聴いている時も十分すぎるほどの感動を味わったはずだったが、塔の中へと入るとまた一味も二味も違う。笛の音が発する波紋が塔を形作る木材一本一本に伝わり、それが跳ね返って大気に木霊し、その跳ね返った音がまた元の笛の音とぶつかり合い絶妙なる調和を描いている。まるでこの鐘の塔全体が龍笛そのものになったかのように自分が主上から飛天の如しと讃えられた鈴の塔での楽献納の時さえ、このような音は決して鳴らなかつた。これは奏者のなせる技なのか、はたまた楽器のなせる技なのか。

雅信は感極まるあまり、ついに涙を流さんばかりとなった。

「嗚呼、いとめでたし」

感情の昂ぶりのあまり、ついに雅信はつぐんでいた口より声を漏らした。そのときだった。帰り道の牛車の中で初めて耳にしてから今までずっと絶えることのなかつた笛の音が、まるで水を打ったようにピタリと止んだのだ。雅信はハッと息を飲んだ。しまったと思ひ、慌てて足を踏み出そうとしたが、しかし同時に暗闇の奥から声が聞こえた。それはか細い今にも消え入りそうな女の声だった。

「そこにいらつしやるはどなたでございますか？」

胸が高なつた。しかし今度は感動や驚嘆によるものではなく、緊張によるもの。思わず頼るように浄厳へと目を向けた。しかし浄厳

はじつと闇の奥へと顔を向けたままじつと動かない。しかもこの暗がりのせいでその表情も全く読めなかった。暗闇の奥は女の声が聞こえたつきりやはり何も物音がしない。このまま黙りを通すわけにも行かず、ええい儘よという気持ちで雅信は口を開いた。

「私は平雅信という者なり。宮中から帰る折、この世のものとは思えぬ美しき笛の音を聴き、是非とも奏者にお目にかかりたいと思い、ここまで来た。さきほどまで笛を奏でていたのはおぬしであるか？」  
「はい」

女の声はやはり枯枝のようにか細い。

「実に見事であった。この延寿京……いやこの世のあらゆる笛の名手であってもそなたの調べにはきつと敵わぬであろう」

「有難き御言葉を。しかしながらそれは私の成した技ではございませぬ。この蓮夢が成した妙技……」

「やはりそれは蓮夢であつたか？」

浄厳が壮年らしい乾いた声で張り上げた。女の声は横から入ってきた浄厳の声に驚いてしまったかのようにぶつとりと途絶える。しかし居なくなつてはいない。雅信も浄厳も暗闇の奥にまだ何かが居るといふ気配を感じ取っていた。

浄厳はつい声を荒らげてしまったことを気恥ずかしく感じ、こぼんと咳払いをすると同じ人物とは思えぬほど声を穏やかに落とし言った。

「いや、失礼した。拙僧、摺鉢山延妙寺の坊主で浄厳と申す。何を隠そう、今より十日前に寺の宝物蔵から盗まれた蓮夢を探すためにここへやつて来た」

そこで一旦言葉を切るが、女からの返事はない。浄厳は続けた。

「只今の汝の調べ拝聴いたすところ、さぞかし名のある龍笛の名手とお見受けする。これほどまでの名手に奏でられるとは蓮夢もさぞかし喜んでおろう。しかしながら、その蓮夢は延妙寺の大切な宝物。今なら先ほどの素晴らしき調べに免じて手荒な真似は控えよう。どうか蓮夢を返してはくださらぬか」

暗がりのせいで雅信は浄厳がどのような顔をしているのか見定めることができない。しかしその声の調子で自ずと想像されるようだった。穏やかに語りかけているようで、腹の深い所、奥底ではしっかりと相手を逃すまいと、声でもって睨んでいるようだった。

そんな浄厳を知ってか知らずか、女の声は依然として聞こえない。あまりに続く静寂に雅信はまさか相手に逃げられたのではないかと、自ずと自分たちの入ってきた出入り口に振り返ろうとした。しかしそのときになってようやく暗闇の向こうから女の声に戻ってくる。

「分かりました。お返ししましょう」

その言葉に雅信がほっと胸をなでおろしかけるが、そこで女の声が「しかし」と続いた。

「お返しする前に、どうしても叶えていただきたいことがございませす」

「申してみよ」

浄厳が返す。

「まず一つ、お二方にこの蓮夢の謂れを聞いていただきたいのです」  
「ほう、蓮夢の謂れか」

こう返すは雅信。雅信はちらりと浄厳に目をやるが、やはり暗がりのせいでよく分らない。しかし彼が何も言っていないので、雅信はこれを恙なしという意向に汲み取り、女に言った。

「ぜひ聞かせていただきたい。これほどの音色を生み出す楽器。よほど腕の立つ職人の技であろう」

雅信の返事に、女は「おお」と歓喜とも感動ともつかぬ声を上げ、その声はあるいはすすり泣いているようにすら聞こえた。やがて疼いていた痛みが治まるかのように声も止むと、女はポツリポツリと語り始めた。

「この蓮夢、今より百年もとせもの昔、ここより西方の大陸にある国の職人の手によって生み出されました。職人の名は高榮こうえいと言い、数々の名器を生み出した天才的な楽器工でありました。特に笛に関しては何百年に一人となしと呼ばれるほどで、その音色は何人も諸侯、果

ては皇帝に至るまで魅了しました。やがて彼国の都に呼ばれ、いくつもの名器を献上する身分となったのです。そして高榮には一人の妹がいました。この女もまた楽器、特に笛を鳴らすことに関しては類い稀なる才を持っており、高榮が作った名器を妹が鳴らして世に広めるという図式が成り立っていたのです。世の人はこれを『高之二楽才』と讃えられました」

「その妹というのは……もしや？」

「はい……何を隠そう私でございます。私たち兄妹はまだ年端もいかぬ内に身寄りを流行病で亡くし、二人で互いに支えあい生きてきました。幸いにも一族は楽器師、楽器工を代々輩出しており、私たち兄妹も幼き頃より兄は楽器工、私は楽器師としての手ほどきを受けており、それを職になんとか食べることは困らずに済みました。」

そのうち、先ほども申し上げましたように都に呼ばれ、宮廷の宴にて皇帝の御前で演奏するという誉をいただき、その宴のために兄はそれまでの経験の粋を結集した一品を紆余曲折を経つつ完成させました。それがこの蓮夢。そして申し遅れましたが、私は名を高蓮こうれんと言い、蓮夢というのも兄が私のために付けた名なのです」

「なるほど。元々蓮夢はそなたの兄がそなたのために作ったものであったのか。しかし、それがどうしてかような土地にまで？」

「はい。それで件の宴は大変な成功をおさめ、私も兄妹は皇帝のご寵愛を受けることとなりました。しかしわずか数年でもとよりご高齡だった天子様は崩御あそばされ、そこから悲劇が始まりました。後継者をめぐって内乱が起こり、その混乱の中で兄は死罪に……そればかりか兄が作り上げてきた数々の名器も焼き捨てられてしまったのです」

高蓮と名乗る声の主はそこでいったん言葉を切り、その頃の事を思い出したのか泣いているように呻いた。

「私は兄や先帝の側近だった方々の計らいでどうにか都を脱し、各地を放浪しました。しかし生き延びたものの先の希望も見いだせず、死ぬことさえ考えました。そんな折り兄の楽器の内、蓮夢だけがど

ういう因果か焼亡の難を逃れ、はるか東のこの成杜に渡ったという噂を耳にしました。全ての希望を失っていた私がこの報にどれだけ救われたことか……。せめてもう一度だけ蓮夢を奏でたいという思いで、港から貿易船に潜り込み、さらにいくつもの歳月を経てようやく成杜へとやってきたのです。しかし……」

高蓮は語調を落とす。

「それまででした。成杜の地を踏んで間もなく病に伏しそのまま果てました。しかしそれでも蓮夢だけはもう一度……と願う心が成仏を許さなかったのでしょう。私の魂は現世に留まり、なおも百年に近い歳月をかけて蓮夢を探し続けました。そしてつい先日、ついに延妙寺の蔵にて悲願だった蓮夢との再会を果たしたのです」

そこでようやく高蓮は話を終えた。

雅信はただいまの話にいたく感銘を覚え、気が付けば両の目よりはらはらと涙を流している。直衣の袖で目元を拭い、今一度暗闇の奥に目を凝らした。依然として何も見えないがそこには唐土衣装に身を飾り龍笛を手に持ち、麗しくたたずむ女の姿が幻視されるようであった。

この高蓮という女はどのような思いをして病の地で果てたのだろうかと雅信は思いを馳せる。過去に偲んでは涙を流し、兄を偲んでは顔を埋める。

「さてもうら悲しき物語よ。かように美しき音色の裏にそのような謂れがあったとは。品のほとんどを焼き捨てられるとは、さぞ高榮殿も高蓮殿も無念であつたらう」

袖を涙に濡らしつつ、雅信は今の我が身がいかに幸福であるかを思う。今の主上の御代は安寧を持ち、政争の種は転がっていないとは言えぬが、好きな管弦を鳴らし暮らしている。いつかこの平穩も崩れてしまうのだろうかとぼんやりと考え、にわかには寒気が襲った。「蓮夢の謂れにつきましてはこれで終わりにございます。そしてこれから申し上げるのがもう一つの願い。

蓮夢を再び取り戻した翌日から十日かけて、かつて天子様に献納

した十の曲を一日一曲ずつ奏でてきました。そして今日が九日目。明日の最後の一曲で今度こそ私の未練も尽くでしょう。ですので、どうかお願いです。蓮夢の返却を一日だけ待つて頂けませぬか。明日の晩の最後の一曲が終わりましたら、必ずやお返しすると約束いたします」

そのとき雅信は何か奇妙な物音を耳にした気がした。縄のような太い何かが床を擦るような乾いた音。しかし音はその一度だけで以降は何も聞こえなかったため、すぐに意識の外へと追いやられた。

「どういたしますかな、雅信殿？」

浄蔵が殊勝に身を低くして尋ねる。

「どうするも、やはり明日まで待とう。高蓮殿がそれで未練が晴れるというのなら」

「私も賛成にございます」

浄蔵の口調はなにか自分と違う意味が込められているような響きを感じ、雅信は少し眉を寄せた。しかし雅信はすぐに思い直して高蓮の声のする暗闇の奥へと向き直った。

「分かった。約束いたそう。明日の晩、同じ時刻にまたここへ来よう」

「おお、有難き幸せ。出来ることならあなた方のために今一度楽を奏でたいところでございますが、故あって叶わぬところ。どうかまた明日お越しくくださいませ」

その言葉が終わるとともに、なにかと板が外れたようなガタンという音が鳴り渡り、雅信は夢から叩き起こされたようにビクリと体を震わせた。

それつきり高蓮の声も、龍笛の音色も何も聞こえず、鐘の塔は夜の静寂が再び支配することとなった。浄蔵は雅信に塔を出ることを促し、彼もそれに続いた。

外に出てから再びこの九重塔を見上げる。夜空の星々その陰で黒々と隠す様はまるで巨人のようだと雅信は思った。

今一度耳を凝らすがいよいよやはり笛の音は聴こえてこない。

「浄厳殿、蓮夢は延妙寺の宝物であるということ忘れて勝手に決めてしまつて申し訳ない」

雅信は今しがた高蓮と交わした約束事を、浄厳の前で軽はずみだつた己を恥じる。しかし浄厳は大らかに笑いを返した。そういえば塔の中ではずっと暗がりの中で浄厳の表情がわからなかつたが、今外に出ると月明かりに照らされてようやくその顔が見えるようになってる。

「なあに、構いませぬ。もう一度あの笛の音を耳にすることができると考えれば」

顔がようやく見えたことによつて雅信は得も言われぬ安心感を感じた。

「それより雅信殿、私めは明晩は少々野暮な用事を済ませてから参上する故、少々遅れるかもしれぬことをお許しく下さい」

「ほう、いったい何用で？」

「鈴の塔へ」

「鈴の塔？」

ここ鐘の塔と真反対に位置する鈴の塔まで何しに行くのかと雅信は気になつたが、それ以上問いただすのもさすがに野暮だと思ひ直し、そこで問答は終わりにした。

雅信と浄厳は同時に東の方角へと目を向ける。摺鉢山の山肌から十五夜の月が昇り、青白く淡い光を降らせていた。その光を背後に背負つて鐘の塔に相對するもう一つの塔、鈴の九重塔が高々とそびえていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3498y/>

---

延寿今昔物語集

2011年11月20日19時47分発行